



中国出張とその移動手段 —南京・淮安・揚州—

文学部 白田 真佐子

2019年暮れから2020年の年始にかけて中国江蘇省の南京・淮安で資料収集を行い、揚州で知り合いの先生にお目にかかって、南京から中部国際空港への直行便で帰国した。その後は感染症の蔓延で、訪中などできない状態である。

南京では図書館の近くのホテルに宿泊し、徒歩で図書館通いをした。こんなところに書店がある、スターバックスがある、ATMがあると発見し、実際にそこに立ち寄りたりもした。その他の移動には地下鉄を利用したが、短期滞在者はチャージ式の地下鉄カードが購入できず、毎回コイン型のプラスチック製チケットを購入していた。新街口は南京の繁華街で、地下鉄に乗るまでの通路にもお店が立ち並び、見ているだけでも楽しい。今回はバスには乗らなかったが、タクシーから外を眺めていると、バスの車体一杯にキューピー（中国語は“丘比”）・マヨネーズの宣伝が描かれていた。中国人は基本的に生野菜を食べないが、サラダにはマヨネーズやドレッシングが必要である。私は中国のスターバックスでサラダをよく注文するので、ドレッシングの必要性は身に染みて感じている。

南京に来る前、淮安に数日滞在した。中部国際空港から上海・浦東空港経由で淮安に飛行機で到着したが、淮安の空港は、九州の大分空港に雰囲気似ていた。淮安という地は、日本に出ている旅行ガイドブックに載っていないので、渡航前の情報が少なくて困った。江蘇省の道路地図は持っていて、これはたぶんマイカーを運転する人用だと思う。揚州の知り合いに聞いても、今は紙媒体の地図ではなくて、スマホで検索するのだと言う。事前にインターネットで調



淮安市内のトラム

べると、淮安には路面電車が走っていて、ホテルから図書館まで乗り換えなしのようでも、ウェブで調べても駅の一覧が出て来なかった。淮安に到着した後、ホテルから図書館まで行きはタクシーに乗り、帰りは図書館と目と鼻の先の駅まで図書館の方が見送ってくださって、ありがたかった。地下通路を通ってホームに到達するので、一人では右往左往するところだった。実際に乗ってみると、路面電車というよりトラムという呼び方がふさわしく、現代的な車体で、土地があるなら地下鉄より建設しやすくして良いと実感した。このトラムに乗ると周恩来記念館、呉承恩記念館等の名所旧跡に行くのも便利である。周恩来記念館には周氏が故郷の淮安に戻る暇もなく、1960年1月上海から北京に戻る時、飛行機の中から淮安を眺めたという写真が展示してあった。今では淮安に空港がある。淮安の某記念館で地図を売っていて、やっと淮安の地図を見つけたと思ったが、観光用でありながらトラムの駅まで載っていなかった。



揚州駅（南京から到着した列車）

淮安の図書館で係の人に尋ねて、淮安の地図をコピーさせてもらったが、これは初めて来た者には詳しすぎた。

淮安から南京までは長距離バスで移動したが、途中サービスエリアで休憩があり、安全運転だった。バスが南京に到着した後タクシーに乗り換えると南京長江大橋を渡った。タクシーの車窓から見えたバスが、先ほど取り上げたキューピー・マヨネーズの広告バスだったのである。

南京から揚州までは鉄道が開通していた。30年ほど前揚州に来た時は鎮江からフェリーで長江を渡り、揚州に到着した。揚州から高郵に用事で行き、そこから南京まではバスで3-4時間かかったのである。今では南京から列車に乗って1時間くらいで揚州に着くのであるから、日帰りもできて大変便利である。チケットは日本にいる時インターネットで購入したが、乗車時はパスポート提示で面倒である。揚州の駅は中心地から少し離れていて、知り合いの先生がマイカーを持っている同僚の先生に頼んで、お二人で迎えに来てくださった。マイカーで知り合いの先生に迎えに来てもらうことは、ここ数年他の土地でも何回かあった。中国の先生方のご好意を大変うれしく思う。

中国国内の高速鉄道、地下鉄やトラム等の市内交通、人民のマイカー所有等、交通手段は発展を遂げている。1979年夏に初訪中した時は訪中団でしか旅行できず、飛行機と団体用のバスで移動していたが、その頃と比べてみても交通手段の発展は目覚ましい。キャッシュレスが中国国内で進んでおり、タクシーを呼ぶにもスマホのアプリがあり、今度訪中が叶った時には、うまく適応できるのかどうか不安な気持ちも多少ある。ともあれ、感染症の状況が収束して、海外渡航が普通にできることを祈ってやまない。